

<前回・ニーバー>

- ・弁証法神学と同世代のアメリカ神学を代表する思想家。
- ・社会科学との接点に特徴。
- ・イェール学派の伝統形成。カウフマン、ガスタフソン、コックス・・・。
- ・『徹底的一神教主義と西洋文化』(60)、『責任を負う自己』(63)
- ・Richard R. Niebuhr (ed.), *H. Richard Niebuhr. Faith on Earth. An Inquiry into the Structure of Human Faith*, Yale University Press, 1989.
- ・東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』日本基督教団出版局、1980年。
- ・ドイツ的体系的な神学に対するアメリカ神学：
 - 哲学的伝統の差異、経験主義・プラグマティズム
- ・自由主義神学の伝統、社会科学への関心

(1) 自由主義神学の継承

- ・自由主義神学・トレルチの視点と方法論

1. キリスト教の歴史的類型

トレルチの『社会教説』：教会／セクト／神秘主義の三類型

↓

1. ニーバー『アメリカ型キリスト教の社会的起源』

(*The Social Sources of Denominationalism*, 1929. ヨルダン社。):

アメリカ型キリスト教としての「教派」(Denomination)

2. 類型論的思考方法、諸類型

- ・*The Kingdom of God in America*, Harper, 1937.

The Sovereignty of God / The Kingdom of Christ / The Coming Kingdom

- ・*Radical Monotheism and Western Culture*, Harper, 1943.

Monotheism / Henotheism (social faith) / Polythesim

- ・*Christ and Culture*, Harper & Brothers, 1951..

Christ Against Culture / The Christ of Culture / Christ Above Culture / Christ and Culture in Paradox / Christ the Transformer of Culture

- ・*The Responsible Self*, Harper & Row, 1963.

man-the-answerer / man-the-citizen / man-the-maker / man-the-law

(2) 信仰論と社会科学

- ・*Faith on Earth. An Inquiry into the Structure of Human Faith*, New Haven/London, 1989.

(ed. by Richard R. Niebuhr)

3. 『地の上の信仰』

・「信仰の現象学」(編集者の解釈)：複数の自己が相互作用からなる社会とそこに成立するコミュニケーションの場(信仰が成立する場)において、主観主義(信仰は客観的な現実とまったく関わりない、たとえば、単なる主観的な願望の投影)と客観主義(信仰を信仰対象の神からのみ理解しようとして、主体の状況という要因を完全に消去可能とする)の抽象性を排しつつ信仰現象が反省される。アルフレッド・シュッツの現象学的社会科学の意味における現象学。

↓

・「反省の方法」：信仰者が現に行っている「信じる」という行為を批判的に吟味すること。信じるという行為自体の自己批判的検討を出発点として信仰の基本構造を解明する。

cf. 客観的所与としての聖書のケリュグマから出発する立場(一種の聖書主義)

神との出会いにおける実存的あるいは主体的な決断から出発する立場(一種の実存主義)

↓

他の自己（他者）とのコミュニケーションという相互主観的場における信仰。

5. ブーバーの対話主義に対して：

6. 「我—汝」に対して、信仰の「我—汝—それ」、第三のものとして「それ」。

プラグマティズムとの関わり：ミードの自己論（社会的自己、自己の社会性。自己は他者（一般化された他者）との対話という社会経験において成立）、ロイス『忠誠の哲学』。

↓

日常的な信仰の一般構造（「信じる」とその関連語句の言語使用の分析）。

7. 市民共同体：民主主義、自由、平等といった理念（第三の要素）に対する個々の共同体メンバーのコミットメントに基づく、市民相互の信頼関係。

科学者共同体における「真理」、夫婦における「子ども」

8. 信仰：「信頼—忠誠」（Trust-Loyalty）の二項による構成

fides-fiducia-fidelitas

・民主主義的システム：市民と政治家の間の「信じる」

市民：選挙で選んだ政治家が代表者として適切な政治を行うことを期待し、政治家を「信頼」する。同時に、その政治家が行った決定に従う（「忠誠」）。

政治家：選挙において自分に代表者としての権限を付託してくれた市民に対して誠実であろうとし、また代表としての自分の決定を理解し支持してくれることに関して市民を「信頼」する。

↓

二重の「信頼—忠誠」

9. 「第三の要素」の決定的意義。「信仰」が「我—汝」に還元できない。

・問題：共同体の構成メンバーの間に複雑な利害対立を存在する場合に、そのメンバー相互間の「信仰」はいかに成り立つか。

・利害対立に陥った相手が自分と同様に「第三のもの」（たとえば国家、民族）に忠誠を誓っていることが相互に承認される場合、相手も自分が信頼し忠誠を誓う第三のものに忠実であることに気づくとき、相手にある種の「尊敬の念」を持つことは可能である。

・「第三のもの」の普遍化可能性：ある特定の共同体に限定される「第三のもの」（社会的信仰）から、他の共同体とも共有できるものへ、そしてさらに人類全体を包括する社会における「第三のもの」まで。→ 徹底的一神教の「神」あるいは「存在の根拠」。

10. 「判断を下し、あるいはそこで我々が判断を行う社会は自己超越的な社会である。自己超越のプロセス、あるいは各々の第三のものを越えた第三のものを指示するプロセスは、存在の全体的な共同体が包括されるまでは、停止することはない」（1963, 87）。

・自己超越的な相対主義

（3）自由主義神学を超えて

11. H・R・ニーバー『啓示の意味』

「歴史的相対主義は歴史に対する妥当性をも意味する」、「宗教的理性を歴史の領域に限定しつつなお、限定された領域における作業によって、キリスト教の歴史的社会的生の、よりよい知的、実際的な組織が産み出されるという希望を抱くことができる」（27）、「したがって、神学はキリスト教史の内側でキリスト教史から始めなければならない。なぜならば、そのほかには選択の余地がないからである。この意味で神学は啓示から出発することを余儀なくされている。ここで啓示とは単に歴史的信仰を意味する」、「客観的に相対主義的である。」（28）

12. 抽象的な普遍主義・客観主義ではなく、具体性から出発し普遍性を展望する相互主観主義。→ 経験の共有可能性と翻訳可能性を前提にして、他者との合意形成に努力する開かれた知性。批判的实在論。

10. ホワイトヘッドとプロセス神学 1

・実証主義的科学理解に対する形而上学思惟の系譜

現代思想の傍流あるいは底流

芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」(京都大学基督教学会『基督教学研究』第24号、2004年、pp.1-23)

(1) ホワイトヘッド哲学へのアプローチ

1. Alfred North Whitehead, 1861-1947 :

Science and the Modern World, 1925

Religion in the Making, 1926

Process and Reality. An Essay in cosmology, 1929 (1969)

Adventures of Ideas, 1933

A Free Press Paperback

< Process and Reality >

Part I: The Speculative Scheme

I: Speculative Philosophy

II: The Categoreal Scheme

III: Some Derivative Notions

Part II: Discussions and Applications

Part III: The Theory of Prehension

Part IV: The Theory of Extension

Part V: Final Interpretation : I: The Ideal Opposites II: God and the World

2. 基本命題

① Speculative Philosophy is the endeavour to frame a coherent, logical, necessary system of general ideas in terms of which every element of our experience can be interpreted. (5)

② The true method of discovery is like the flight of an aeroplane. It starts from the ground of particular observation; it makes a flight in the thin air of imaginative generalization; and it again lands for renewed observation rendered acute by rational interpretation. The reason for the success of this method of imaginative rationalization is that, when the method of difference fails, factors which are constantly present may yet be observed under the influence of imaginative thought.

(7)

3. 形而上学の方法＝一般化の方法

数学基礎論から科学哲学、そして形而上学へ(自然学→形而上学)

『数学原理』、『自然認識の諸原理』『自然という概念』『相対性原理』

(1) より高次の一般性へ(終わりなき前進とそのつどの定式化の試み)

経験の事実によって前提とされる一般的観念、自明性を越える

形而上学的志向性(全体へ、宗教と科学)

(2) 数学との対比、抽象化の問題(二つの誤謬)

(3) 一般化と経験への適応(検証): 合理主義と経験主義の統合

(4) 枠組みの構築と想像力、訓練された本能

(5) 知の体系性

(2) ホワイトヘッドの形而上学の枠組み

① 現代科学の实在理解とその一般化

- ②一切の実在は相互作用連関の内にある
actual entity (the final real thing) / the 'principle of relativity'
- ③現実的存在の構造：現実態は両極的である
環境に限定される → 作用因、機械論的 → 自然的極
自らを形成する → 目的因、目的論的 → 精神的極
二つの極の総合＝合生 (concrecence)
- ④現実的存在の時間構造：時空的連続体としての現実的存在
過去（環境的過去）・自然的抱握／未来（主体的目的）・概念的抱握（新しさの創造）／
現在・合生
- ⑤現実的実在はプロセスである（自己創造を通じた世界創造）
・自己創造のプロセス・有機的プロセス（合成 concrecence）＝世界の形成過程への寄与
創造性 (Creativity)、神、永遠的客体 (eternal objects)
・生成から存在へ：現実的存在の三重の性格
1. 過去の世界によって与えられたという性格
抱握 (prehension)：客体に関心 (concern) を持つこと、感取 (feeling)
 2. 因果的に限定されながら、ある目的観念を未来において実現するという性格
合生過程：自己原因的、主体
満足 (satisfaction)：主体的目的に実現
 3. 後続する現実的存在に対して自らを客体的存在として与える
自らを超え出て自らを他者に与える：surject (自己超越体)
因果的に客体化される、存在となる
1. 3：他との連関・連帯、2：個としての自由・自己原因
- ⑥感取と決断
- ⑦主体的目的 (the subjective aim)：強制力として作用するのではなく、促し・誘因となる

4. 山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社、1977年。

「アクチュアル・エンティティ」「環境的世界によって限定されながら、自らを限定してゆくところの「自らを創造する被造物」「機械論的な因果関係によって支配されながら、自らを限定し、「新しさ」 (novelty) を創造してゆく、「世界を構成する最小の有機体」「生命の領域と無生物のそれとを分かち二元論を拒否して、一元論的立場をとる」 (21)

「近世以降、科学と宗教との乖離」、「思惟するもの」としての精神的実体と、「延長をもったもの」としての物体とを、はっきり二分するデカルトの立場、「延長を本質とする物体観は、目的論的自然観とははっきり訣別する」 (22)

「宗教は科学とは無縁の、人間の生命に関わる魂内部の問題と考えられてきたのである」 (23)

「科学から導き出された諸観念は想像力を通して、それらがそこから由来する限られた領域を越え出て、すべての事物に適用できるように一般化されるのである」、「哲学と科学との相互交流」「同様のことは科学と宗教との関係についても」 (24)

「科学が主題とする対象は、窮極因にしたがっての自己創造性の度合が、比較的低い諸現実態であり、逆に宗教が意識的に問題にされるのは、本能を越え出て、知性とか知恵が働いてくるような、高次の諸現実態においてである、とはいえるであろう。しかし本来宗教はそのような領域にのみ局限することは、正しい考え方ではないであろう」

「そのつど、神は働いている」、「アクチュアル・エンティティが限定されつつ自らを限定してゆくとすれば」 (25)、「自然法則」「の有り様も、神の働きと決して無縁のものとは考えられないのである」 (26)

(3) ホワイトヘッドと宗教

1) 宇宙論的構図 (目的論的な世界の創造過程)

自然科学から一般化→形而上学

この枠組み内に、宗教はいかに位置づけられるのか

創造性／神／永遠的客体／外延的連続体

目的因／作用因／形相因／質料因、プラトン『ティマイオス』における「神」

2) 神の本性の三重性

5. 神も一つの現実的存在である

In the first place, God is not to be treated as an exception to all metaphysical principle, involved to save their collapse. He is their chief exemplification. (405)

6. 神の本性の三つのアスペクト (一つの現実的存在としての全体的な神の、相互に独立で相関した仕方): 原初的本性、結果的本性、自己超越的本性

原初的本性: 概念的抱握

結果的本性: 自然的抱握

三重の本性: 神は世界に依存し、世界から独立であり、世界に働きかける

①原初的本性 (「神から世界へ」 1 - 働きかけ・誘因)

7. 永遠的諸客体とそれを現実化する現実的存在との関係性

永遠的客体と外延的連続体から時空的連続体・現実的存在の社会の形成という観点での神の役割、形相によって質料を限定し、現実の世界を構築する

8. 永遠的諸客体の相互の関連性

神による永遠的諸客体の非時間的評価が、時間的世界の経過に先立って非派生的になされる

9. 最初の主体的目的を供給、説得的誘因 (persuasive lure)

現実的存在の合生過程を導いてゆくのが、神の原初の本性から直接導き出される主体的目的、理想的な完全性の実現への衝動

10. 外延的連続体の諸現実的存在による原子化が、時空的連続体に結果する。

外延的連続体の原子化、選択的制限は神の決断にもとづく

②結果的本性 (「世界から神へ」)

展開する宇宙の諸現実的存在の神による自然的抱握

神の本性は世界の創造的前進の結果としてある。

神による世界の自然的抱握は選択的 (= 神の記憶) であり、あるものは消極的抱握を通して神から排除される (= 神の審判)

③自己超越的本性 (「神から世界へ」 2 - 世界への内在)

神が自らを後続する現実的存在に与件として与えること

ホワイトヘッドの神の特徴

↓

3) 神と世界の逆対応

神と世界の逆対応ともいうべき力動的な関係

神に関しては原初的本性が優先、他の現実的存在の場合は過去によって与えられたという性格から出発

神は能動から受動へ、世界は受動から能動へ展開する

4) 万有在神論 (ハーツホーン)

・神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

It is as true to say that God is permanent and the World fluent, as that the World is permanent

and God is fluent.

It is as true to say that God is one and the World many, as that the World is one and God many.

It is as true to say that the World is immanent in God, as that God is immanent in the World.

It is as true to say that God transcends the World, as that the World transcends God.

It is as true to say that God creates the World, as that the World creates God. (410)

・「神は三重の性格の三一的統一者として、世界を、人間をも含めてすべての事物の経験を通して、否、それらとの共同において、作ってゆく人格的全体者なのである」

「神が万物との共同において作ってゆくこの世界においては、それを構成する個々のものは、それぞれがそれ自身でありながら、否、そうあることによってこそ、全体に寄与貢献しているのである」、「個と全体との調和的關係」(山本、210)

(4) ホワイトヘッドの神論(まとめ)

キリスト教と自然科学、キリスト教と仏教

- ・神の本性の三重性：cf. 無からの創造、三位一体、人格性
- ・神と世界の逆対応：cf. 予定と自由意志
- ・万有在神論：cf. 超越と内在、有神論と汎神論

神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

<参考文献>

A. ホワイトヘッド

1. Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World*, 1925 (1967).
A Free Press Paperback. (上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社、1981年。)
2. *Process and Reality. An Essay in cosmology*, 1929 (1969)
A Free Press Paperback. (山本誠作訳『過程と実在』松籟社、1979年。)
3. *Adventures of Ideas*, 1933 (1967) A Free Press Paperback.
(山本誠作・菱木政晴訳『観念の冒険』松籟社、1982年。)

B. ホワイトヘッドについて

1. 山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社。
2. 田中裕『ホワイトヘッド 有機体の哲学』講談社。
3. 栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社。
4. 宮平望『現代アメリカ神学思想 平和・人権・環境の理念』新教出版社。
5. John B. Cobb, Jr. and David Ray Griffin, *Process Theology. An Introductory Exposition*, Westminster John Knox Press, 1976.
6. John B. Cobb Jr., *Process Theology as Political Theology*, Manchester University Press / The Westminster Press, 1982.
7. David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism. Overcoming the Conflicts*, State University of New York Press, 2000.
8. 特集「A. N. ホワイトヘッドの平和論」(全国日本学士会『ACADEMIA』No. 156、2016.4)